

# パーリ語文献における *bujjhana-* と *bodhana-* について

稲 葉 維 摩

## 1. はじめに

ブッダ (*buddha-*), 菩提 (*budhi-*), 菩薩 (*budhisattva-*) などの術語が動詞語根 *budh-* の派生語であることからわかるように、仏教では語根 *budh-* に由来する諸々の語が重要な位置づけにある。その中、*ya-* 現在 *bujjha-ti* 「目覚める, acc. に気づく」と使役 *bodhe-ti* 「目覚めさせる, 気づかせる」との対立は、いわゆる自利利他に関わる意味内容を表現する。本稿ではアッタカターを含めたパーリ語文献の範囲で、語根 *budh-* の *ya-* 現在と使役との対立関係に注目し、両者の意味内容の展開をたどる。このことを通して、*bodhe-ti* は上記の意味を中心としながら、成立の遅い文献で「(人を真実等に) 目覚めさせる, 気づかせる」を表すようになること、さらに *Paṭiṣ* を初めとし、アッタカター文献で名詞形 *bujjhana-* : *bodhana-* の対立が生じたことを示す。

## 2. ニカーヤにおける *bujjha-ti*, *bodhe-ti*

4ニカーヤとクツダカニカーヤの一部 (*Dhp*, *It*, *Sn*, *Th*, *Thī*, *Ja*) において、語根 *budh-* の現在形 *bujjha-ti* は「acc. に気づく, 目覚める」を表す。この語形は *ya-* 現在 *búdhya-te/ti* 「目覚める, 気づく」<sup>(1)</sup> に一致するが、パーリ語では現在形をもとに、アオリストや未来などが作られる。

(1) D II 349v *littaṃ paramena tejasā gilam akkhaṃ puriso na bujjhati / gila re gila pāpadhuttaka pacchā te kaṭukaṃ bhavissati* // 「最高の毒で塗りつけられ

ているのに、アクシャを貪り食っている人は気づいていない。食え、この！食え、悪いばくち打ちめが！後でお前に鋭い苦しみが生じるだろう」。

(2) A IV 449v(S I 48v) *sambādhe gataṃ okāsaṃ avidā bhūrimedhaso / yo jhānaṃ abujjhi buddho paṭilīnaniṣabho muni* // 「圧迫の中に余地があるのを広い智慧ある者は知った、即ち静慮に目覚めたブツダ、〔群れから〕離れた雄牛のような男、ムニは」。

(3) Thī 453 *bālā te duppaññā acetanā dukkhasamudayoruddhā / desente ajānanta na bujjhare ariyasaccāni* // 「そういう愚かな、理解の悪い、あらわでない、苦の集合によって妨げられている者達は、示していることを認識しておらず、アーリヤの人の真実に気づかない」。

simplex では「(眠りから) 目覚める」という表現は確認されず、*pra-*、*prati-*を伴う場合に表される。(4)ではダンマを知らず、他の主張に導かれる者達のことを眠っている者達と表現している。さらに、アッタカターでは *bujjha-ti* の説明として「煩惱の継続という眠りから起き上がる」と言われる。<sup>(2)</sup>このような点から、「(真実等に) 目覚める」の意味内容は眠りから目覚めることとの比較に基づく表現であると理解できる。つまり、真実等に目覚めていない状態が眠りである。

(4) S I 4v *yesaṃ dhammā appaṭividditā paravādesu nīyare / suttā te na ppabujjhanti kālō tesam pabujjhituṃ* // 「諸々のダンマを知らない者達は他の主張に導かれる。彼らは眠っていて目覚めていない。彼らが目覚めるに適切な時である」。

(5) A III 251 (IV 150, V 342) *dukkhaṃ supatī, dukkhaṃ paṭibujjhati, pāpakaṃ supinaṃ passati, devatā na rakkhanti, asuci muccati. ... sukhaṃ supatī, sukhaṃ paṭibujjhati, na pāpakaṃ supinaṃ passati, devatā rakkhanti, asuci na muccati.*

「ほとんど眠らず、ほとんど目覚めず、悪い夢を見、神格達は守らず、不浄なものが解放される。…よく眠り、よく目覚め、悪い夢を見ず、神格達は守り、不浄なものは解放されない」。

*abhi-sam-bujjha-ti* は *anuttara- sammāsambodhi-* や縁起等を「知る、理解する」という意味を表す。

(6) D II 108 *puna ca param ānanda yadā tathāgato anuttaram sammāsambodhim abhisambujjhati tadā 'yaṃ paṭhavī kampati saṃkampati sampakampati sampavedhati*。「また他に、アーナンダよ、如来がこの上ない完全な正しいさとりを理解する時、その時、この大地は震え、おののき、震動し、揺れる」。

(7) S II 25 (26) *katamo ca bhikkhave paṭicca samuppādo. jātipaccayā bhikkhave jarāmaraṇam uppādā vā tathāgatānaṃ anuppādā vā tathāgatānaṃ. ṭhiā va sā dhātu dhammaṭṭhitatā dhammaniyāmatā idappaccayatā. taṃ tathāgato abhisambujjhati abhisameti. abhisambujjhivā abhisametvā ācikkhati deseti paññāpeti paṭṭhapeti vivarati vibhajati uttānīkaroti passathā ti c' āha*。「比丘達よ、どれが縁起か。誕生という基礎から、比丘達よ、老いと死が生じる、如来達の出現を経ても、あるいは如来達の出現を経なくても。その要素はダンマとして留まっている状態として、ダンマにおける決定という状態、これを基礎とする状態として決定している。そのことを如来は知り、達成している。知り、達成した後、説き、示し、示唆し、確立し、開き、分け、広げ、『見よ』と言っている」。

現在 *bódha-ti* 「気づく、注意する、考慮する」はヴェーダ語において Rg-Veda 以後、マントラや韻文に命令法が残るのみである。<sup>(3)</sup> パーリ語では、*ava-*、*ni-* を伴う直説法に若干数が確認される。<sup>(4)</sup>

(8) Ja III 151 v. 192 *te janā sukham edhanti narā saggaṭā-r-iva / ye vācam*

*sandhibhedassa n' āvabodhanti sārathi* // 「それらの諸部族は幸せに繁栄している、天界に行った人々のように、即ちつながりの切断に属する言葉に気づいていない者達は、御者よ」。

(9) Ja III 134 v. 164 *yo ca uppatitaṃ atthaṃ khippam eva nibodhati / muccate sattusambādhā na ca pacchānutappaṭi* // 「起こった事柄を速やかに知る者は、敵の圧力から逃れる。そして後で苦しめない」。

使役 *bodhe-ti* (<sup>(5)</sup>*bodhāya-ti*) は「(眠りから) 目覚めさせる、(～を) 覚ます」を意味するが、(4)に見られるような真実に目覚めていない者を「目覚めさせる」という表現は見つからない。

(10) S I 170v (171v) *na hi nūn imassa samaṇassa piṅgalā tilakā hatā / sottaṃ pādena bodheti tenāyaṃ samaṇo sukhī* // 「今やこの沙門の眠りを、褐色でしみのある傷つけられた女性は足で覚まさない。そのことによって、この沙門は幸せである」。

以上のように、*bujjha-ti* の中心的な意味は「(眠りから) 目覚める、acc. に気づく」である。(4)では真実等に目覚めていない、あるいは気づいていない状態を眠りと比較していることが読み取れる。従って、(3)のアーリヤの人の真実に気づいていないことなども眠って目覚めていない状態と言える。一方、以上に検討した文献の範囲では、このような真実に目覚めていない者を目覚めさせるという内容は使役によって表現されない。

### 3. ニカーヤ以後の *bujjha-ti*, *bodhe-ti*

成立が遅いと認められる Bv, Ap では、<sup>(6)</sup>*bujjha-ti* 「(真実等に) 目覚める、気づく」、*bodhe-ti* 「(真実等に) 目覚めさせる、気づかせる」の意味内容が中心的になる。

(11) Ap p. 28 v. 198 *gajjato te mahāvīra vasudhā sampakampati / bodhaneyyā*

'va *bujjhanti* *tasanti mārakāyikā* // 「君（サーリプッタ）が吠えている時、偉大な勇者よ、大地は一斉に揺れる。他ならぬ目覚めうる者達は目覚める。悪魔の集まりは震える」。

(12) a. Bv 2.194 (Ja I 28 v. 204) *bodhaneyyaṃ janaṃ disvā sataśahassee pi yojane / khaṇena upagantvāna bodheti taṃ mahāmuni* // 「目覚めうる人を見て、10万ヨージアナでも、4/5秒でやって来て、その者を偉大なムニは目覚めさせる」。

b. Bv 2.195 (9.4, Ja I 28 v. 205) *paṭhamābhisamaye buddho koṭṭisatam abodhayi / dutiyābhisamaye nātho navutikoṭṭim abodhayi* // 「第一の到達においてブッダ（ディーバンカラ仏）は、10億の者達を目覚めさせた。第二の到達において主は、9億の者達を目覚めさせた」。

Nidd I, Paṭis では *buddha-* の語義解釈に *bujjhitar-* 「目覚める／気づく者」と *bodhetar-* 「気づかせる者」が1回現れる。気づかせる内容は先立つ *bujjhitar-* から補われる。

(13) Nidd I 457 (Paṭis I 174) *buddho ti ken' atthena buddho. bujhiā saccānī ti buddho. bodhetā pajāyā ti buddho. sabbaññutāya buddho. sabbadassāvītāya buddho. ...* 「ブッダというのは、どういう意味でブッダなのか。諸々の（4つの）真実に目覚める／気づく者という意味でブッダである。〔諸々の真実を〕生き物に気づかせる者という意味でブッダである。すべてを認識する状態の点でブッダである。すべてを見る状態の点でブッダである。…」。

蔵外文献の Mil も如来が衆生を目覚めさせることを *bodhe-ti* によって表現する。(14)では、如来の努めが衆生の目覚めに必須と見なされていることが読み取れる。ブッダゴーサの主著 Vism (15)は(13)に基づき、*buddha-* を自ら目覚め、他者を目覚めさせる者だと定義する。

(14) Mil 169 *dukkaraṇ cāpi mahārāja tathāgato karoti bodhaneyye satte bodhetuṃ. yadi mahārāja tathāgato kiriyaṃ kiriyaṃ hāpeyya, bodhaneyyā sattā na bujhiheyyuṃ. yasmā ca kho mahārāja yogaññū tathāgato bodhaneyye bodhetuṃ, tasmā tathāgato yena yena yogena bodhaneyyā bujjhanti tena tena yogena bodhaneyye bodheti*. 「そしてまた、なし難くても、大王よ、如来は目覚めうる衆生達を目覚めさせる。もし、大王よ、如来がなされるべきことを次々と放棄するならば、目覚めうる衆生達は目覚めなくなってしまう。けれども、大王よ、如来は目覚めうる者達を目覚めさせるための方法を認識している者であるが故に、それ故、如来は、目覚めうる者達が目覚めるそれぞれの方法、そのそれぞれの方法によって目覚めうる者達を目覚めさせる」。

(15) Vism 209 *yaṃ pana kiñci atthi ñeyyaṃ nāma, sabbass' eva buddhattā vimokkhantikaññāvasena buddho. yasmā vā cattāri saccāni attanā pi bujhi aññe pi satte bodhesi, tasmā evamādīhi pi kāraṇehi buddho. imassa ca pan' atthassa viññāpanatthaṃ bujjhitā saccānī ti buddho, bodhetā pajāyā ti buddho ti evaṃ pavatto sabbo pi niddesanayo paṭisambhidānayo vā vitthāretabbo*. 「また、認識されるべきであることは何でも、他ならぬすべてに関して目覚めている状態の故に、解脱の終わりに属する認識によってブッダである。あるいは4つの真実に自ら目覚め、他の衆生達をも目覚めさせたが故に、それ故、このようなことを初めとする理由によってブッダである。また、この意味を識別させることを目的として『諸々の真実に目覚める／気づく者という意味でブッダである。生き物に気づかせる者という意味でブッダである』とこのように説明された『ニッデーサ』の仕方、あるいは『パティサンピダー』の仕方すべてが〔ここで〕詳説されるべきである」。

以上のように、*bujjha-ti*, *bodhe-ti* は成立の遅い文献において「(真実等に)目覚める、気づく」, 「(真実等に)目覚めさせる、気づかせる」という表現が中

心的になる。先に見た4ニカーヤ等に対し、ここには意味内容の展開が認められるだろう。ya- 現在では自身の目覚めである自利が、使役では他者を目覚めさせる利他の側面が表されていると言える。そして Nidd I と Paṭis はこの両側面をブッダの定義とし、ブッダゴーサはそれに従っている。

#### 4. *bujjhana-* と *bodhana-*

名詞 *bodhana-* は語根の標準階梯に *-ana-* 接辞を付して作られた動作名詞である。語根の意味の他、使役を初めとする *-aya-* 語幹動詞にも対応する。<sup>(7)</sup> ニカーヤでは Ap, Bv, Paṭis を除いて、*pra-* が付加された *-ppabodhana-* 「通知する、起こす、目覚めさせる」が楽器などを複合語の前部分として用いられる。

(16) Ja VI 396 v. 1452 *piṭṭhimatī pattīmatī sabbasaṃgāmakovidā / ohāriṇī saddavatī bherisaṃkhappabodhanā* // 「〔パンチャーラの軍隊は〕背〔に乗るもの（象や牛）〕を備え、歩兵を備え、すべての戦闘に長け、奪い去るものであり、騒音を備え、太鼓やホラ貝で通知するものである」。

(17) Th 893 *sameto naccagītehi sammaṭṭāḥappabodhano / na tena suddhiṃ ajjhagamā mārassa visaye rato* // 「踊りや歌と一緒にになり、シンバルの打ち鳴らして目覚め、悪魔の領域に休んでおり、そのこと（欲望の対象の享受）によって清浄に到達しなかった」。

Ap, Bv では、*bodhana-* の意味内容が真実等に関わるようになる。(18)では「他者を真実に目覚めさせる」の意味で現れる。だが(17)がそうであるように、*bodhana-* に使役の意味は必須でない。(19ab)も文脈上、自身の目覚めに理解できる。

(18) Bv 26.22 *tāvatā tiṭṭhamāno 'haṃ tāremi janataṃ bahuṃ / ṭhapayitvāna dhammukkaṃ pacchimaṃ janabodhanaṃ* // 「その限りを通して留まりながら、私は多くの人々を渡している、後の人を目覚めさせる、ダンマというたいまつを掲げて」。

(19) a. Ap p. 588 v. 49 *pañcahatthā tavaṃ hontu tato hontu mamaṃ ise / tena siddhi saha hotu bodhanatthāya tavaṃ ise* // 「手5つ分〔のスイレン〕は君のものであれ。それから〔残りのスイレン3本は〕私のものであれ、リシよ。それとともに、君に成就があれ、目覚めを目的として、リシよ」。

b. v. 50 *isi gahetvā pupphāni āgacchantaṃ mahāyasaṃ / pūjesi janasammajjhe bodhanatthāya mahā-isi* // 「リシは花々をつかみ、やって来る偉大な名声ある者（ディーパンカラ仏）を、人々の中の中央で供養した、即ち偉大なりシは目覚めを目的として」。

*bujjhana-* はパーリ語の現在 *bujjha-ti* から作られた動作名詞だが<sup>5</sup>、ニカーヤには *Paṭis* を除いて一度も現れない。*Paṭis* では *bodhana-* と共起する。従って、*bujjhana-* は *bodhana-* との意味的な対比のもと、現在形から二次的に作られたものと理解できる。

(20) *Paṭis* I 18 *ekatte bujjhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte anubujjhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte paṭibujjhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte sambujjhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte bodhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte anubodhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte paṭibodhanaṭṭho abhiññeyyo. ekatte sambodhanaṭṭho abhiññeyyo*。〔〔対象が〕1つの状態において、<sup>(8)</sup> 気づく意味が理解されるべきである。1つの状態において、順に気づく意味が理解されるべきである。1つの状態において、知覚する意味が理解されるべきである。1つの状態において、完全に知る意味が理解されるべきである。…気づかせる意味が…順に気づかせる意味が…知覚させる意味が…完全に知らせる意味が理解されるべきである〕。

*bujjhana-* と *bodhana-* の対比はブッダゴーサの真作と認められる *Vism* と4ニカーヤのアッタカターには現れず<sup>(9)</sup>、その後の文献に確認される。一例として、(21)は(13)の “*sabbaññutāya buddho*” と “*sabbadassāvitāya buddho*” に対する注釈であ



る。それぞれに *bujjhana-* と *bodhana-* を定義している。

(21) Pj I 15, Nidd-a II 441 *sabbaññutāya buddho ti*

*sabbadhammabujjhanasamatthāya buddhiyā buddho ti vuttaṃ hoti. sabbadassāvitāya buddho ti sabbadhammabodhanasamatthāya buddhiyā buddho ti vuttaṃ hoti.* 「『すべてを認識する状態の点でブツダである』というのは、すべてのダンマに目覚めることを目的とする知の点でブツダであると言われている。『すべてを見る状態の点でブツダである』というのは、すべてのダンマに目覚めさせることを目的とする知の点でブツダであると言われている」。

ダンマパーラの著作である Th-a には、ブツダのさとりである *sammāsambodhi-* の語義解釈として *bujjhana-* と *bodhana-* が用いられる(22a)。ここでも両者が意味的な対立関係を示している。独覚と声聞の *sambodhi-* には目覚めさせることに関わる定義はされないため(22bc), *bujjhana-* と *bodhana-* の両側面はブツダの特徴であると理解される。その点で、(13), (15)の定義にも通じる。なお、ブツダ  
ゴーサの著作における *sammāsambodhi-* の説明では、このような定義は見つ  
<sup>(11)</sup>  
らない。

(22) a. Th-a I 8 *tattha sammāsāmaṇi sabbadhammānaṃ bujghanato bodhanato ca sammāsambodhi.* 「そこで、完全に自ら、すべてのダンマに関して目覚め、目覚めさせるが故に正しい完全なさとりである」。

b. *paccekaṃ sayam eva bodhī ti paccekasambodhi. ananubuddho sayambhūñāṇena saccābhisamayo ti attho.* 「個人で、即ち自分だけのさとりだから、独覚のさとりである。従って目覚めた者のない、自身で存在する認識を伴った真実の達成という意味である」。

c. *satthu dhammadesanāya savaṇante jātā ti sāvakā. sāvakānaṃ saccābhisamayo sāvakasambodhi.* 「師のダンマの説示の聞き終わりに生じた

者達だから声聞達である。声聞達の真実の達成が声聞のさとりにある」。

近年、上座部の伝統に対するブッダゴーサの正当性や彼自身が規範となったこと、またブッダゴーサ以後の展開が指摘されつつある。従って、<sup>(12)</sup>(21)における *bujjhana-* と *bodhana-* の対比や、*sammāsambodhi-* の語義に両者を定義した(22a)なども、ブッダゴーサの真作には見られなかった、その後の展開と言える。

## 5. 結 論

本稿では動詞語根 *budh-* に由来する諸語について、*ya-* 現在 *bujjha-ti* 「目覚める、気づく」と使役 *bodhe-ti* 「目覚めさせる、気づかせる」に基づく対立に注目し、意味内容を検討した。成立の遅い経典以後、使役は他者を真実に目覚めさせることを表す。*ya-* 現在が表す自らの真実への目覚めとともに、これらのことは自利利他に関わる意味内容を表現している。Nidd 1, Paṭiṣ, ブッダゴーサはこれら両側面に基づいてブッダを定義する。名詞 *bujjhana-* は *ya-* 現在 *bujjha-ti* から作られた動作名詞であり、*bodhana-* 「目覚めさせる」と対立関係にある。両者の対比はブッダゴーサの真作には確認されず、その後の文献に展開する。

### ・略号、参考文献

パーリ語文献のテキストは Pāli Text Society 版を用い、略号は CPD に従った。

AiGr=Wackernagel, Jacob und Albert Debrunner. 1954-1975. *Altindische Grammatik*. 4 Bde. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

馬場紀寿 2008『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ』東京：春秋社。

Bechert, Heinz. 1958. Über das Apadānabuch. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 2: 1-21.

CPD=Trenckner, Vilhelm, et al. 1924-2011. *A Critical Pāli Dictionary*. 3 vols. Copenhagen and Bristol: Pāli Text Society.

Endo, Toshiichi. 1996. Bodhisattas in the Pāli Commentaries. *Buddhist studies (Bukkyō kenkyū)* 26: 65-92.

———. 2002. *Buddha in Theravada Buddhism: A Study of the Concept of Buddha in the Pāli Commentaries*. (First edition, 1997) Dehiwala: Buddhist Cultural Centre.

- . 2012. The Commentator Dhammapāla's Method of Work: Some Observations. *Buddhist studies (Bukkyō kenkyū)* 40: 43–66.
- Gotō, Toshifumi. 1987. *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen: Untersuchung der Vollstufigen Thematischen Wurzelpräsentia*. Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 林隆嗣 2011「上座部の共業 (sādhāraṇa-kamma) について—ダンマパーラ以降—」『印度學佛教學研究』60-1: 338–331 (221–228).
- Hinüber, Oskar von. 1996. *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Jamison, Stephanie W. 1983. *Function and Form in the -āya-Formations of the Rig Veda and Atharva Veda*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- Kulikov, Leonid. 2012. *The Vedic -ya-presents: Passives and intransitivity in Old Indo-Aryan*. Amsterdam, New York: Rodopi.
- 森祖道 1984『パーリ仏教註釈文献の研究—アッタカターの上座部的様相—』東京：山喜房佛書林。

## 註

- (1) Kulikov (2012: 332–336).
- (2) Ps I 83 (III 138, Mp II 52, Pj I 84, Nidd-a I 67, Paṭis-a I 126, III 600, As 217, Vibh-a 310) *bujjhatī ti kilesasantānaniddāya uṭṭhahati cattāri vā ariyasaccāni paṭivijjhati nibbānam eva vā sacchikaroti*.「目覚めるとは、煩惱の継続という眠りから起き上がる、あるいは4つのアーリヤの人の真実に通じる、あるいは他ならぬ涅槃をあらわにする」。
- (3) *bódha-ti* に対して、*ya-* 現在 *būdhyā-te* が「起きる、目覚める」に加え、「気づく」の意味をも担っていく (Gotō 1987: 217–221, Kulikov 2012: 332–336)。
- (4) *avabodhāmi* Ja V 215 v. 68; *avabodhanti* Ja III 151 v. 192; *nibodhati* Ja III 134 v. 164, 151 v. 191, 167 v. 63, 438 v. 26, IV 58 v. 97, Ap p. 563 v. 21.35. なお、S I 7v, Dh p 143 *appabodhati* に関して、CPD は "*apa-bodhati*" に登録する。
- (5) Jamison (1983: 149f.).
- (6) Bechert (1958), von Hinüber (1996: 60–62).
- (7) AiGr II.2.185–202.
- (8) Paṭis-a I 99 *ekatte ti ārammanekatte ekārammane ti attho*.
- (9) 多くのアッタカターがブッダゴーサに帰せられるが<sup>5</sup>、Vism と 4 ニカーヤのアッタカターが真作とされる (森 1984: 469f., 馬場 2008: 14–19)。
- (10) Endo (1996) はパーリ語文献における *bodhi-*, *bodhisatta-* について検討した。Vism 以降に説明される 3 種の *bodhi-* (*sammāsambodhi-* (*abhisambodhi-*), *paccekabodhi-*, *sāvaka-bodhi-*) とそれぞれを求める *bodhisatta-* の展開に注目している。
- (11) ブッダゴーサによる *sammāsambodhi-* の注釈として、Ps I 54 (Spk II 153, Sp I 139) *sammāsambodhin ti sammā sāmaṇ ca bodhiṃ. atha vā pasatthaṃ sundaraṇ ca bodhiṃ*.「正しく完全なさとりをというの、完全に、そして自らのさとりを。あるいは讃えられた美しいさとりを」(Endo 1996: 75)。さらに次の例も見つかる。Sv III 881,

Spk III 211 *anuttaraṃ sammāsambodhin ti arahattaṃ sabbaññutaññāṇaṃ vā paṭivijjimsū ti dasseti*. 「この上ない正しく完全なさとりをというのは、阿羅漢の状態を、あるいはすべてを認識する状態の認識を知ったということを示している」。Spk I 130 *tattha ahaṃ hi mahārājā ti anuttaraṃ sabbaseṭṭhaṃ sabbaññutaññāṇasaṅkhātāṃ sammāsambodhiṃ ahaṃ abhisambuddho ti attho*. 「そこで私は、大王よというのは、この上ない、すべての中で最高のすべてを認識する状態の認識と呼ばれる正しく完全なさとりを私は理解したという意味である」。

- (12) ダンマパーラに関して von Hinüber (1996: 102f., 136-142), 馬場 (2008), 林 (2011), Endo (1996, 2002, 2012) など。